

校長室より

二松学舎大学附属高等学校
校長 鶴飼敦之

「二松から飛翔へ」～一期一会～

皇居持久走大会 ～大都会を駆け抜ける～



澄みわたる青空のもと、1・2年生を対象とした皇居一周持久走大会が実施されました。スタートは桜田門、そこから皇居大手門前を抜け、千鳥ヶ淵の脇を通り、英国大使館、最高裁判所、警視庁前へと続く、歴史と日本の中枢を感じるコースです。多くの市民ランナーが憧れる「皇居マラソン」の舞台を、本校生徒たちも力強く駆け抜けました。

距離は男女ともに一周約5キロ。男子の部では、トップが1年生で17分台という記録で独走優勝を果たしました。また女子の部では、21分台で三位までがわずか一秒差という大接戦。最後の直線までデッドヒートとなりました。仲間の声援を背に懸命に腕を振る姿は、観る者の胸を打つものでした。



当日は早朝より多くの保護者の皆様が応援に駆けつけてくださいました。温かな拍手や励ましの言葉が、生徒たちの背中を押していたことは間違いありません。心より感謝申し上げます。

世界ではオリンピックで日本人選手の活躍が続き、我々に大きな刺激を与えてくれています。本校生徒も、その姿に触発されながら、それぞれが自己ベストに挑戦しました。勝敗や順位だけでなく、「昨日の自分を超える」ことこそが持久走の真価であり、学校行事の意義でもあります。この達成感を自信に変え、今後の学校生活や学習、部活動へとつなげていくことを期待しています。



ミラノ・コルティナ冬季オリンピック ～テレビ観戦記～

連日のメダルラッシュに沸く今回の冬のオリンピック。テレビ越しではありますが、日本選手の堂々たる活躍に大きな勇気と感動をもらっています。極限の緊張の中で力を発揮する姿には、日々の地道な努力の重みを感じずにはられません。

個人的に長く応援しているのはスキージャンプの高梨沙羅選手です。4年前の出来事を乗り越え、その思いを背負い続けて挑む姿は、多くの人の胸を打ったのではないのでしょうか。前回チームメートの伊藤さんが祝福する場面は、とても感動的で、スポーツのもつ温かさを改めて感じました。

また、大会直前に骨盤骨折という困難に見舞われながらも最後まで挑戦を続けた平野歩夢選手の姿勢にも拍手を送りたいと思います。メダルを逃したインタビューで「生きるか死ぬかの気持ちで滑りました。」という覚悟、「また0から積み上げていきたい」という前向きな言葉には、逆境にあっても一歩ずつ努力を重ねる大切さが凝縮されているように感じました。そして、「納得いく結果で追われなかったんですけど、こうやってここで滑れるのも、自分が諦めずに来られたのも、周りの人たちのサポート、見てくれる人たちの応援が全力を出し切れていない」と周囲への感謝を話していました。

華やかな結果の裏には、計り知れない努力があります。皆さんにも、オリンピックたちの姿から「挑み続ける心」を感じ取ってほしいと思います。日々の学びや部活動も、まさに小さな積み重ねの連続です。その先にこそ、自分自身の成長があるのだと信じています。

大会も残すところあと数日。選手の活躍を期待しましょう。

「りくりゅう」ペアが逆転の金メダル スゴイ スゴイ スゴイ スゴイ スゴイ スゴイ...